

# 親子関係からみた『嵐が丘』の一考察

宮 副 紀 子

## 要 旨

Emily Brontë の『嵐が丘』は、とりわけ翻案作品において、Catherine と Heathcliff の悲恋物語であるとされることが多い。しかし、Catherine と Heathcliff の成長過程（とりわけ親子関係）を考察すると、二人の成長のプロセスの相違ゆえに、お互いへの思いの質が異なっていることに気づく。つまりふつうの悲恋関係とよべるものではないのだ。

しかも、Catherine と Heathcliff がその相違をお互いに理解できないからこそ、ますます激しくぶつかりあい、苦悩することになるのではないだろうか。本論では、Catherine と Heathcliff の関係とともに、Hindley の成長も考察することにより、第一世代の物語から第二世代への時の連なりが意味することも考えて見たい。

キーワード：自我同一性(アイデンティティ)、親(母)の愛、家庭、アウトサイダー、基本的信頼

## I. はじめに

1847年に Emily Brontë が『嵐が丘』を出版されて、160年余り経た今も、数多くの研究論文のみならず、Pasty Stoneman の“Brontë Transformation”<sup>1)</sup> のリストにも明らかのように、おびただしい数の文化的副産物が生み出されている。それらの中でも、一般大衆向けの翻案作品は、多くの場合、第一世代の Catherine (Catherine Earnshaw) と Heathcliff のこの世のものとも思えない激しい悲恋の物語として描かれている。たとえば、Willam Wyler<sup>2)</sup> による映画のように、二人の愛に焦点があてられた第一世代の物語だけの物語とされている場合が多い。

本稿において、多くの翻案作品では Catherine と Heathcliff の悲恋物語とされる『嵐が丘』を、この作品における親子関係を考察することにより、単なる「悲恋物語」ではない読み方を探ってみたいと思う。なお、登場人物の幼少期からの人格形成を考察するにあたって、E. H. Erikson<sup>3)</sup> の自我同一性についてのごく基本的な考え方などを参考にする。

1) Stoneman, Pasty (1996), *Brontë Transformations*, Prentice Hall Harvester Wheatsheaf.

2) Wyler, William (1939), *Wuthering Heights*, The Samuel Goldwyn Company.

3) E. H. Erikson (1902-1994) はフロイトの精神分析理論を発展させ、同一性 (identity) の概念を中心に、統合的な人格の完成を漸成論 (epigenesis) により人生周期という視点からとらえている。さらに Erikson は、漸成的順序に従う人間の発達において、自我の発達にあらかじめ予定された課題を設定されていると考え、核心的葛藤を解決するための8段階 (乳児期、早期乳児期、遊戯期、学齢期、青年期、初期成人期、成人期、成熟期) のライフサイクルを提示している。

そして、各段階の発達課題を達成しなければ、次の発達課題を有する段階へと進むことができないと

小説冒頭において、Nelly (Nelly Dean) が Lockwood に Wuthering Heights にまつわる話を話し始める場面は以下のである。

One fine summer morning—it was the beginning of harvest, I remember—Mr. Earnshaw, the old master, came downstairs, dressed for journey; and, after he had told Joseph what was to be done during the day, he turned to Hindley, and Cathy, and me—for I sat eating my porridge with them—and he said, speaking to his son—<sup>4)</sup>

ここに、Earnshaw 家の 4 人と乳母の娘 Nelly の一家団欒のあたたかい光景が描かれており、Lyn Pykett<sup>5)</sup> の指摘するヴィクトリア朝家庭小説の一面をみることができる。第一世代の Catherine と Hindley (Hindley Earnshaw) にとって、いかにも家庭らしい風景が描かれるのはこの場面だけなのである。それというのも、リバプールに歩いて出かけた父、Mr. Earnshaw が 3 日目の夜遅くに孤児 Heathcliff を連れて帰宅するからだ<sup>6)</sup>。この Heathcliff の到来ゆえに、この一家の様子はすっかり変わってしまうのだ。Mr. Earnshaw がそれまで一家の跡継ぎとして大事に育ててきた長男 Hindley よりも Heathcliff を溺愛するようになるのだ。こどもたちを愛し育ててきたであろう Catherine と Hindley の母、Mrs. Earnshaw は Heathcliff 到来後 2 年ほどで他界してしまうが、“...and at Mrs. Earnshaw’s death, which happened in less than two years after...”<sup>7)</sup> と、いかにもついでというように、1 行で報告されているのみなのだ。このように、『嵐が丘』において、母、Mrs. Earnshaw の描写はこの 1 行と Heathcliff 到来時に抗議している姿が描かれているのみで、母の存在感は希薄である。また、第 2 世代も、Linton (Linton Heathcliff) を除き、Hareton (Hareton Earnshaw) も Cathy (Catherine Linton) も生まれると同時に、または直後に母親が亡くなってしまふ「母の不在」の物語なのである。Mrs. Earnshaw が亡くなった後、Hindley と Catherine の子ども時代は決して幸多いものではなかった。まさしくエミリの詩に詠われるように、「幼い頃の前途の希望を身寄りの愛情が目ざめさせなかった」<sup>8)</sup> からである。

---

している。これらの各段階において、「発達の危機 (development crisis)」にさらされており、成功と失敗の両極端が想定されていますが、そこで生じる葛藤を Erikson は「心理、社会的危機 (crisis)」と呼びました。この解決については、「成功か失敗か」というより、両極端のバランスが望ましいとしました。なお、20 世紀後半の Erikson の研究全てを、18 世紀末から 19 世紀の人々のものさしとするのにはやや無理があるのですが、後述する L. A. Pollock の学説に従い、本論においては、親子関係については対応可能であると考え、参考にしました。

4) Emily Brontë (2003) *Wuthering Heights*, W. W. Norton & Company, 28–29.

5) Pykett, Lyn (1989) *Emily Brontë*, Barnes & Noble Books, 73.

6) “And at the end of it, to be flighted to dearth!” he said, opening his great-coat, which he held bundled up in his arms, “See here, wife; I was never so beaten with anything in my life; but you must e’en take it as a gift of God, though it’s as dark almost as if it came from the devil.”, *Wuthering Heights*, 29.

7) *Wuthering Heights*, 31.

8) Soul, where kindred kindness  
No early promise woke  
Barren is your beauty  
As weed upon the rock

Wither, Brothers, wither,  
You were vainly given –  
Earth reserves no blessing  
For the unblest of Heaven

では、まず Catherine の成長過程を考察してみることにしよう。「子どもの冗談の分からない」<sup>9)</sup> Mr. Earnshaw は Catherine の並外れた奔放さゆえに彼女を全く理解できないでいる。

“Nay, Cathy,” the old man would say, “I cannot love thee; thou’rt worse than thy brother. Go, say the prayers, child, and ask God’s pardon. I doubt thy mother and I must rue that we ever reared thee!”<sup>10)</sup>

Nelly によれば、Mr. Earnshaw が体が衰えてゆく中で、Catherine の行く末を心配しての言葉としているが、無邪気で「何も悪気はなかった」<sup>11)</sup> Catherine にとっては厳しい言葉であらう。7歳の時に母を亡くし、おそらく彼女なりに心から慕っていた父に理解されないということが、彼女の心に少なからず変化をきたしたに違いない。なぜなら、この時期は Erikson によると、「子どもは深く、排他的に両親と一体化しており、さらには、近隣や学校に関心を持ち、社会における自分の適格性を身につけ始める」はずの頃なのである。

一方、Hindley は Heathcliff が Earnshaw 家に連れてこられる14歳までは当家の跡取り息子として育てられてきたに違いない。しかし、Heathcliff の到来によってアーンショー家の寵児としての座を Heathcliff に奪われるだけでなく父親の信頼も失ってしまう。素養から見ると、Edgar よりも Hindley の方がすぐれている、と Nelly が語っているくらいだから、なぜ Mr. Earnshaw が Hindley を見捨てるような態度をとったのかは不明である。父の “Hindley was naught, and would never thrive as where he wandered.”<sup>12)</sup> の言葉は親が口にする言葉としては冷酷である。Hindley は Erikson が、「急速な身体的成長と性的成熟がもたらす、自分についての自他のイメージや認識の動揺を克服して、自我同一性の感覚を得ることができるか否か」とする大切な時期に、実の父に彼の人間性を否定されてしまうだ。

18世紀における親子関係については、歴史家によって判断が異なっている。R. Porter などは「18世紀の子どもたちは厳しく躰けられ体罰も多く見られた」<sup>13)</sup> とし、また、J. Banerjee は、「ヴィクトリア朝の多くの家庭において、子どもは甘やかさず、過度に厳しく育てるものとされていた。そして、Mr. Earnshaw の Catherine や Hindley への態度は、当時の極度に厳格な親たちを非難している」<sup>14)</sup> としている。一方、L. A. Pollock は Ariès<sup>15)</sup> の学説を正しくないとし、時代による親の対応の変化があることに反論している。つまり、「こどもに対する親の態度に

Brontë, Emily Jane (1995) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, 229.

9) 中岡洋, 芦澤久江共訳 (1996), ブロンテ全集 7 卷『嵐が丘』, みすず書房, 64.

10) *Wuthering Heights*, 34.

11) ブロンテ全集 7 卷『嵐が丘』, 63.

12) *Wuthering Heights*, 33.

13) Porter, Roy (1982) *English Society in the Eighteenth Century*, Penguin (Non-Classics). (目羅公和訳『イングリッシュ18世紀の社会』, 法政大学出版社, 1996年) 23-24.

14) Banerjee, Jacqueline. (1996) *Through the North Gate: Childhood and Growing Up in Britain Fiction, 1719-1901*. Peter Lang. 58-59.

15) Phillip Ariès (1914-1984) は『〈子供〉の誕生』において、ヨーロッパの中世から18世紀にいたる子どもと家族生活をめぐる心性史の研究から「〈子供〉の発見は現代の出来事であり、新しい家族の感情は、そこから芽生えた」としている。

今日まで論じられてきたような劇的な変化はなかった<sup>16)</sup> という研究結果を示している。Emilyが親子関係を、『嵐が丘』の時代、または、『嵐が丘』を書き上げたヴィクトリア朝のいずれに設定しているかにもよるのだが、Pollackの主張に従えば、いかほど親の意に染まぬ子どもであったにしても、いつの時代も、たいていの親は基本的には子どもを愛し育んできた、と考えてよいだろう。とすれば、Barnerjeeの主張するように、Emilyは当時の子育て風潮への風刺を描いたのではないだろうか。

さて、P. Shellenbaumは*Forgotten Children*において、「親の愛の欠如は子どもに基本的信頼と自己愛の欠如と言う共通の影響を与える。その呪縛からのがれることができるのは、親の愛と決別する時なのであるが、それが果たせない場合、抑うつ症となる。また、親の愛の要求を一時的に解消するために、一番身近な人にその要求を押し付ける<sup>17)</sup>」としている。ならば、Catherineにとって、Heathcliffの存在はまさに天恵であったと思われる。CatherineはHeathcliffを「好きになりすぎて<sup>18)</sup>」おり、Mr. Earnshawの理解不足からつもの孤立感をHeathcliffとふれあうことで埋め合わせていくことになる。

一方、Hindleyは、彼を認めてくれる同居人もなく、数年後に、妻Francesという愛すべき存在により自我同一性を取り戻すが、結婚後1年余りでFrancesは死んでしまう。その後、Hindleyは自己を破滅させて行く。Hindleyは父の死後、Heathcliffにひどい仕打ちをするが、彼がHeathcliffの到来によって受けなければならなかった屈辱と親の愛情不足を考えると、彼を暴君よばわりすることはあまりにも一面的にHindleyを判断することになるのではないか。Heathcliffの尽きることのない復讐の念とは対照的にHindleyのHeathcliffへの仕返しは次第に自虐的なものへと姿を変えてゆく。彼が酒と賭博に溺れ、すさんでゆくさまは、Nellyによって痛々しく、時にいとおしく語られる。

では、Heathcliffの子ども時代はいかなるものであったのだろうか。彼はCatherineが6歳の時にEarnshaw家に連れてこられた孤児である。30年たった時点でもNellyに「それ」呼ばわりされる得体の知れない存在である。だが、不思議なことにMr. EarnshawはHeathcliffを溺愛し、娘のCatherine、息子のHindleyよりもはるかに彼を可愛がるようになる。次第にHeathcliffは

16) Pollock, Linda A Pollock (1983) *Forgotten Children*, Cambridge University Press.

Pollockはそれまでの様々な子どもにまつわる歴史の見解を第一次資料(日記、出版物、自叙伝など)のみから洗い直し、また18世紀よりも19世紀初期の親の方が子どもの管理に厳しかったという見解のみ他と同じなのだが、「子どもはいつも残酷な待遇に耐えてきたわけではない」としている。主に絵画からの分析を行ったArièsを初め、第一次資料のみならず莫大な資料から分析を行ったStone, Shorterなどの論にも反論している。彼女は親が子どもに深い愛情を示し、基本的な信頼関係を築いているのは昔も今も同じであるとしているのだ。言い換えれば、親子の関係には個体差はあっても時代による差はないということである。Pollockの分析は、まず第一次資料を残すことが出来るという調査母集団の偏りが絶対的な分析を生み出すとは限らないという欠点がある。とはいえ、幸い、書き残す余裕のある人々は中流階級以上に属する人々であるので、ヨークシャーの片田舎とはいえ、比較的裕福であったEarnshaw家を考えるものさしにしてもよいのではないかと考える。

17) Shellenbaum, Peter, (1988) *Die Wunde der Ungeliebten*., Kösel-Verlag GmbH & Co. München (島田洋子訳『愛されない者の傷』(有)あむすく1997年), 84-85.

18) ブロンテ全集7巻『嵐が丘』, 63.

家の中で力を持つようになり、「子馬交換事件」<sup>19)</sup>でも明らかなように、自分の力を自覚し、Earnshaw 家における並ならぬ厚遇を十二分に利用するしたたかさを持ち合わせている。彼の出自は不明で、Mr. Earnshaw の隠し子説まで唱えられるほど、彼の生い立ちについては憶測が尽きることはない。しかし、Earnshaw 家に連れて来られた7歳からは Mr. Earnshaw の絶大なる信頼を得、かつ Catherine という仲間を得ることにより、家庭に彼の居場所を見出すことができ、彼の自我同一性の形成を行うことができたと仮定できる。ちなみに彼のこの時期は、Erikson によると、関心が家族から近隣、学校へと向かう時期であり、Mr. Earnshaw の寵愛と Catherine との心の繋がりを得てアイデンティティがゆるがされることはなかったと考えられる。しかし、Mr. Earnshaw の死後、彼の Earnshaw 家での地位はまっさかさまに転落してしまう。

このような、出自もわからず、名前もファミリーネームをもたないアウトサイダー Heathcliff と、家庭のアウトサイダーで、親と親の愛を求めてやまない Catherine は意気投合する。Philip K. Wion は “The Absent Mother in *Wuthering Heights*”<sup>20)</sup> という論文において、心理学的見地から Catherine と Heathcliff の関係を母と子、かつ子と母として提示している。Catherine からのみ判断すると、まさにこの Wion の見解は当を得ているといえよう。なぜなら、Catherine は彼女を愛し信頼してくれる母のいる家庭を切に求めていたと考えられるからである。とはいえ、Heathcliff も Catherine と母と子、又は子と母の関係を築くことができるとは考えにくい。Heathcliff はリバプールでは “the poor, fatherless child”<sup>21)</sup> であったにしても、Mr. Earnshaw に溺愛され、Mr. Earnshaw と基本的信頼関係を築くことにより、自己同一性がゆるぎないものとなり、それ以降、自我同一性の危機を乗り越えることができたため、Catherine のように母の存在を求めることはなかったであろう。確かな自分を確信できる Heathcliff にとっては、あくまでも Catherine は常に他者であり、恋愛の対象となりうる異性だったと考えられる。

では、ここで Catherine の Heathcliff への思いを考察してゆくことにしよう。Mr. Earnshaw の死後、Catherine の心の平穏も長くは続かない。Heathcliff は嵐が丘の召使に格下げされ、それまで Heathcliff と寝床をともにしてきた Catherine は彼と一緒に寝ることができなくなる。その7年後彼女は譫妄状態で「そうしたらとても不思議なんだけれど、この七年間のあたしの生活がすっかり真っ白けになっちゃったの！」<sup>22)</sup> と語る。実際に Heathcliff が彼女の元から失跡してしまうのは、彼女が Heathcliff と引き離されたほぼ3年後なのであるが、すでにこの時点で、自我同一性に混乱をきたし始めていたと考えることができる。そして、その3年後、Catherine が Nelly に Edgar (Edgar Linton) から求婚されたことを告げた夜、それは同時に Heathcliff が Catherine の言葉を盗み聞きし、悲観し、嵐が丘から逃げ出した夜でもあるのだが、彼女は次のように語る。

19) *Wuthering Heights*, 31–32.

20) Wion, Philip K, (1992) “The Absent Mother in *Wuthering Heights*.” Bedford. *Wuthering Heights*. 264–378.

21) *Wuthering Heights*. 30.

22) プロンテ全集7巻『嵐が丘』, 200.

Nelly, I am Heathcliff—he's always, always in my mind—not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to my self—but as my own being.<sup>23)</sup>

幼少時に愛情に恵まれず母親（または父親）から基本的信頼感を得ることのできなかった Catherine は自分がまぎれもない自分であると確信するためには Heathcliff という同胞が必要だったのだ。P. Shellenbaum の見解を援用すると、親の愛の欠如を補ってくれるのは、Heathcliff の存在だったのだ。Catherine は、Heathcliff は彼女の存在に不可欠な存在、彼が彼女のアイデンティティそのものである、と語っているのだ。Catherine にとっての Heathcliff は彼女のかげがえのない他者というよりも、はるかに切実に彼女が彼女として生きてゆくためにかけがえのない存在であるのだ。Catherine と Heathcliff の関係においては性愛的な要素が希薄であるとよく言われるのは、このように、前者から後者への愛情と後者から前者への愛情は性質を異にしているからなのだ。Catherine にとっての Heathcliff は彼女自身そのものであり、言い換えれば彼女の生命にかかわる存在なのである。恋愛の対象となりうる他者として Heathcliff を認識できないから、Heathcliff がいなくなることなど想像できないのだ。しかし、その予期せぬことが起こり、彼女の存在の危機的状況にみまわれ、最初の精神錯乱を引き起こしてしまう。Erikson の *Childhood and Society* において、「小児分裂病患者の経歴を調べてみると、いずれの場合にも母親との疎隔が見られる」<sup>24)</sup> としており、幼少時から母、もしくはその代理人に基本的信頼感 (basic trust) を抱けないまま成長した Catherine が精神障害を引き起こす可能性は十分あった。そして彼女のアイデンティティを取り戻させてくれた Heathcliff の失踪が彼女に同様のショックを与えたとしても不思議ではないのであろう。

ところで、12歳の Catherine がそれまでのように Heathcliff と一体化したようにすごすことができなくなったのは、成長ゆえに避けられない事態だったのだ。Catherine が Thrushcross Grange に忍び込んで、飼い犬に噛まれ怪我をするのだが、これは S. Gilbert と S. Gubar が、この一件を、“psychological rite de passa” (通過儀礼)<sup>25)</sup> としているように、その時期が来てしまったからなのである。無邪気に Heathcliff が大好きで一緒にいることで、求め続けていた親の十分な愛情と信頼を埋め合わせていた Catherine であるが、時のいたずらで、Heathcliff よりも一足先におとなの世界に仲間入りしてしまったと考えられる。やがて Catherine は Edgar に淡い恋心を抱き、社会体制にからみとられるように、Edgar との結婚の決意する。Nelly は Catherine の唯一の相談相手でありながら、Catherine に愛情に基づいたアドバイスなどできない。従って、Catherine が Edgar との結婚の決断をするのは、かりそめにも大人の仲間入りをした彼女の精一杯の判断だったといえるだろう。

では、18世紀後期において、Catherine のような娘が Heathcliff と結婚することは可能だった

23) *Wuthering Heights*. 64.

24) Erikson, Erik H. (1963) *Child and Society*, W. W. Norton & Company, 197.

25) Gilbert, Sandra M & Gubar Susan (1978) “Looking Oppositely: Catherine Earnshaw’s Fall.” Bloom, *Emily Brontë’s Wuthering Heights*, 91.

のだろうか。R. Porter は「当時、上級階級以外でも男性が女性を養い家を構えるまでは結婚しないことになっていた」<sup>26)</sup> とし、L. Stern は「結婚について進歩的な考え方をしていた Defoe ですら情欲にかられての結婚は狂気、自暴自棄、家の没落などをもたらす」<sup>27)</sup> としている。そして、何より当時の女性にとって結婚は生きてゆくための一大事業であったし、Hindley という当主のいる *Wuthering Heights* に独身のまま居座り続けるわけにはゆかない、という当時の女性の弱い立場がある。また家柄も申し分のない Edgar に淡い恋心を抱いてもいただろう。「リントンと結婚すれば、あたしはヒースクリフが出世するのを助けて、お兄さんの力の及ばない地位に就けてあげられる」<sup>28)</sup> というのは、まことに幼い思いつきだが、Catherine にとっては最善の判断だったのだ。彼女の「いま、ヒースクリフと結婚したら、わたしの格が下がるでしょう」<sup>29)</sup> という言葉を盗み聞きしてしまった Heathcliff は Catherine の裏切り行為とみなし、*Wuthering Heights* から姿をくらます。この時期には Erikson によると、Catherine は青年期になっており、まさに「自分はこの自分である」と、自我同一性形成が達成できる時期なのに、唯一彼女を認めてくれる Heathcliff が姿を消してしまい、彼女の自我同一性は拡散をおこす。Heathcliff が嵐が丘を出奔して3年後に Thrushcross Grange にやって来るが、その時、Catherine はかけがえのない存在である Heathcliff との再会に狂喜する。その彼女の振る舞いはなんとも幼稚で、Heathcliff 同様、きわめて自己中心的である。しかしながら、社会的身分としては明らかに彼女が Edgar を配偶者であることを認めている。Heathcliff が Catherine と言いつ争いになり、それを Edgar が聞きつけて来たため、三人の激しい言い争いが生じるのだが、その時 Catherine は Edgar に “We are vanquished! we are vanquished!”<sup>30)</sup> と叫ぶのだ。Linton を蔑む発言なのだが、あくまでも彼女にとって “we” となる相手は Edgar なのだ。

一方、Heathcliff の Catherine への思いは、すでに述べたように、ロマンチックラブそのものである。Heathcliff は Mr. Earnshaw の死後 Earnshaw 家での地位はまっさかさまに転落してしまう。それまでの厚遇を当然のこととしか考えられない Heathcliff は Hindley に強烈な憎悪を抱くことになる。彼は人への恨みをあからさまにし、「あいつが死ななきゃいいんだが」<sup>31)</sup> と、Hindley への復讐を決意する言葉を口にする。13歳の子どもが抱く恨みの言葉としてはあまりに痛烈であり、ここに、すでに、成人後の Heathcliff らしさが垣間見れるのではないか。彼の関心は現世、かつ形として存在するものに注がれる。愛する対象も復讐する対象もしかりなのだ。そして、Catherine の死後、彼女の眠る墓を2度も発き、彼女が幽霊でもいいので姿を現してくれることを望む。Heathcliff が「妙な変化が近づいているんだよ」<sup>32)</sup> となるまで、Catherine の死

26) 『イングランド18世紀の社会』208.

27) Sterne, Lawrence. (1979) *The Family, Sex, and Marriage in England, 1500-1800.*, Pelican Books. (北本正章訳『家族・性・結婚の社会史1500年-1800年のイギリス』勁草書房, 1992, 231)

28) ブロンテ全集7巻『嵐が丘』, 129.

29) ブロンテ全集7巻『嵐が丘』, 127.

30) *Wuthering Heights*, 90.

31) ブロンテ全集7巻『嵐が丘』, 94.

32) ブロンテ全集7巻『嵐が丘』, 521.

後18年間、目で見、手で触れることのできる Catherine を求めて、拷問のような苦しみを味わい続けることになる。Catherine が自分の体を「肉体の牢獄」と呼ぶのは対照的である。Heathcliff はロマンチックラブの相手、すなわち形而下の存在としての Catherine を求め続けるのだが、Catherine は「私の Heathcliff」と呼ぶ、むしろ形而上の存在としての Heathcliff と求める。同様に自分自身についても、Catherine はその生身の肉体を煩わしいものとしてとらえているが、Heathcliff は生身の存在にこだわり続ける。お互いに求め合うものがすれ違ったまま Catherine は死んでいくのだが、Heathcliff には Catherine の思いはなかなか理解できない。

Catherine の Heathcliff への思いはロマンチックラブではなく、かけがえのない母親の愛情を求めるのに等しいものであり、かつ Heathcliff はきわめて切実に彼女の存在を左右する人物であるといえるだろう。一方、Heathcliff は自己を確立できたがゆえに他者を愛する余力があり、他者としての Catherine に恋心を抱くようになるのだ。このように、お互いの思いは性質を異にするものだったのである。しかし、その切実さは拮抗するものであり、その描写もゴシック小説の手法で描かれることが多く、尋常の男女関係をはるかに超えたものであるがゆえに、読者に与える感動も印象もひととき強烈である。

本論では、「歓びの子」<sup>33)</sup> である第二世代について言及できなかったのだが、Emily が『嵐が丘』で伝えようとしたのは、Catherine と Heathcliff とのお話だけに終わらない、第一世代 (Catherine と Hindley) から第二世代 (Cathy と Hareton) に連なる『嵐が丘』全体からのメッセージであることは言うまでもないだろう。言い換えれば、『嵐が丘』は、「親の愛」を求め続け、「家庭」に受容されなかった第一世代の「崩壊する家庭」の物語と、「親または保護者」の愛に生まれ、断絶しかけた「家庭を再生する」第二世代の物語であるとも言えるだろう。この大軸を見失うと、第二世代は付け足しになり、翻案作品の一部に見られるように、第一世代の Catherine と Heathcliff の悲恋物語になってしまうのでないだろうか。

すでに述べた様に、Catherine と Heathcliff の関係がこの世のものとも思えないほどの様相を示すのは、それぞれのお互いへの思いが性質を異にするため、どうしても相容れることができない、お互いを苦悩せしめ、激しくぶつかり合い、大きな破壊的エネルギーを生み出すことになるからだ。しかし、それで終わるのではなく、Emily は、さらにそこに第一世代とは異なり、曲がりなりにも愛情に支えられて育った第二世代の物語も並行させているのだ。Cathy と Hareton は逆境にも決して押しつぶされることなく、時を未来へとつないでゆく、激しくはな

---

33) Child of Delight ! with sunbright hair,  
And seablue seadeep eyes;  
Spirit of Bliss, what brings thee here,  
Beneath these sullen skies ?  
.....  
"Guardian angel, he lacks no longer;  
Evil fortune he need not fear:  
Fate is strong but love is stronger;  
And more unsleeping than angel's care."  
*The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, 230.

いが力強い創造的エネルギー有している。Emily は、「破壊する」第一世代から「創造する」第二世代へ、さらに未来へと連なる時の流れを表していると考えられる。そして、その時の流れの源をなっているのが、Catherine と Heathcliff の恋愛をはるかに凌ぐ激しい思いとぶつかり合うエネルギーなのではないだろうか。

[Works by Emily Brontë]

- Brontë, Emily (2003) *Wuthering Heights*, W. W. Norton & Company  
 中岡洋／芦澤久江 共訳 プロンテ全集7巻『嵐が丘』みすず書房、1996  
 Brontë, Emily (2003) *Wuthering Heights*, Bedford/St. Martin's.  
 Brontë, Emily (1995) *The Complete Poems of Emily Jane Brontë*, Columbia University Press.  
 中岡洋訳 (1991) 『エミリー・ジェイン・ブロンテ詩集』国土社。

[Works Cited]

(洋書)

- Benerjee, Jacqueline (1996) *Through the North Gate: Childhood and Growing Up in Britain Fiction, 1719 – 1901*, Peter Lang.  
 Berry, Laura C. (1999) *The Child, the State, and the Victorian Novel*, University Press of Virginia.  
 Bloom Harold, ed. (1987) *Emily Brontë's Wuthering Heights*, Chelsea House Publishers.  
 Erikson, Erik H (1968) *Identity: Youth and Crisis*, W. W. Norton & Company.  
 Erikson, Erik H (1963) *Child and Society*, W. W. Norton & Company.  
 Ewbank, Inga-Stina (1966) *Their Proper Sphere : A Study of the Brontë Sisters as Early Victorian Female Novelists*, London: Edward Arnold.  
 Gilbert, Sandra & Gubar, Susan (1979) "The Madman in the Attic", *The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*, Yale University Press.  
 Hafley, James (1958) "The Villain in Wuthering Heights", *Nineteenth-Century Fiction* Volume 13, University of California Press, pp. 199 – 215.  
 Jacobs, Carol (1987) "Wuthering Heights: At the threshold of Interpretation", ed. Bloom, *Emily Brontë's Wuthering Heights*, pp. 99 – 118.  
 McNees, Eleanor ed. (1996) *The Brontë Sisters Critical Assessments vol. II*, Helm Information Ltd.  
 Miller, J. Hillis (1963) "Emily Brontë", *The Disappearance of God*, Schken Books, New York, pp. 157 – 211.  
 Pollock, Linda A (1983) *Forgotten Children*, Cambridge University Press.  
 Pykett, Lyn (1989) *Emily Brontë*, Barnes & Noble Books.  
 Stoneman, Pasty, ed. (1993) *Wuthering Heights*, The Macmillan Press Ltd.  
 Van Ghent, Dorothy (1953) "On Wuthering Heights" *The English Novel: Form and Function*, New York: Holt, Rinehart & Winston.  
 Wion, Philip K, (1992) "The Absent Mother in Wuthering Heights", Linda H. Peterson ed. *Wuthering Heights*, Bedford, pp. 364 – 378.

(和書)

- Ariès, Phillip (1960) *L'Enfant Et La Familiale Sous L'Ancien Régime*. Éditions du Seuil (杉山光信, 杉山恵美子共訳『子どもの誕生』みすず書房、2003年)  
 遠藤辰雄編 (1993) 『アイデンティティの心理学』ナカニシヤ出版  
 小池滋 (1999) 『ゴシック小説を読む』岩波書店  
 Shellenbaum, Peter (1998) *Die Wunde der Ungeliebten*, Kösel-Verlagb GmbH & Co. München (島田洋子訳『愛されない者の傷』(有)あむすく、1997年)

- Stone, Lawrence (1979) *The Family, Sex, and Marriage in England, 1500–1800*. Pelican Books (北本正章訳『家族・性・結婚の社会史1500年–1800年のイギリス』勁草書房, 1992年)
- 中岡洋、内田能嗣編 (2005) 『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』世界思想社.
- Picard, Liza (2000) *Dr. Johnson's London*. Weidenfeld & Nicolson (田代泰子訳『18世紀ロンドンの私生活』東京書籍株式会社, 2002年)
- Porter, Roy (1990) *English Society in the Eighteenth Century*, Penguin Books Ltd.. (目羅公和訳『イングランド18世紀の社会』法政大学出版局, 1996年)
- Macfarlane, Alan (1987) *The Culture of Capitalism*. Basil Blackwell Ltd, Oxford (常行敏夫, 堀江洋文共訳『資本主義の文化』岩波書店, 1993年)